好色一代男　8冊　WA9-3　03-001
国立国会図書館

No 21626/22

好色一代男

東京図書館

二十一歳 恵乃まてが弥
京手かや者の事
二十二歳 袖の海の意賣
伝れとき極女の事
二十三歳 鬼邪もらひぎる物
うき世小路ゑとこと女す
二十四歳 一歳の枕物ぐるひ
大くらぎこ寐の事
二十五歳 集礼は五手の外
越後寺泊り極女の事
二十六歳 本綿布子きかりの世
伝田の漢女想燭の比ぢ也す
二十七歳 口舌の事ふ徒
賜神子かゝるひのす

巻三 目録

高橋蔵書

好色一代男 8冊 WA9-3 03-002

国立国会図書館

好色一代男 8冊 WA9-3 03-003
国立国会図書館

癒のまて銀

世にまめバ袴肩衣をむつりし人の風情とて、紛毎に髪ゆハすれ、あらの事無きバ十徳にさゝ聟て、若し小男山、今こ楚、楽阿弥と、八情の、葉の座といふ所に、この所にて、三十万両の小刺の内衣を造らせ、西より銀の間、枕繪の、襖障子、都よりうつくしき我、つまこ取よせ、誰にてもなく、其時はなぐるれ撲すしの腰絹をさ給て、志ゆくさなぐ、黒き所まで、元見せしも不禮講の、おりまゐ、是成面し、此人もとハ、若狭の小漢の人や、小園もちの、舟つきれ、さくまを、敦賀の遊女、のこらず見捨て、今上がこにまもみぬ、世をみ勘商の身と成て、

よる面をなき浪の声、諷うたひと成て、交野牧方、葛葉にさし懸り、橋本に、泊積バ、大和の猿ゝ西のこやれ、戒まハし、日ぐらしの、歌念佛がやうの影の扇とて、同じ穴の、梳川、梟ハ様に、化れ給うし、此所も、賣子、浮世比丘尼の、つまり、紛にもひとあて、ゆゑに、みるまなし、のこれ物とて、古扇にこ笠にしが、ぶり、放生川をまたりて、常盤といふ所に入て、竹一村の奥に、ちら利とも、寺屋従の、みとをれ、裏ハと、里人に、そづ称をれぞ、歴このつまひ所と、かうれ、さてハうすひハかたし、我方捨くと、一抑子、うなぐて、志を湧がり、志わら戸ぐり、声をれしまゐ

うらへバ耳がしこ幾人、まぐなんぬうこなりぞ待をと
やうまぬ見るに公家の花とし子かと、替ハ待て、賤
しさかうちに、こうらぶ、清うひ崩して、穀にうとまれ
こうしぬのうぬに、あくまなわさ田楽と、京近くに
ず給る人の目をたつうし、おりふし、揚弓をしまも
花のくやうく、朱書ふらいに、あらそハ待しに、武田かこの
道具を備て、取弓取矢にして、四本を一組、一筋ハ
切、它に、通まこバ、座中、目線、覚して、多線所望するに
教ひ利、去御方ハ、琴をなぐして、爪の多き線、かい
なくに、御しをまぬに、かまうなる、ぶとうつり、う寸
むらきさの、服紗物より、瞿麦の紋所ひ、爪出て

若ハ指に、あひ口をきやとうてまいりまをまぬ、見楽
泥中より、玉の光うと、花もハ待て、其様言葉も弱て
しぶらく、北里にと、ゆぐ給ひ、明日京都へ、女線かく元に
のぼり給ひ、いざ同し道に、と、誘へ、有傳やうも
覚給ひ、そをく、京ハこさよく、少女の呼ちり、うまぬハし
こさ線、向ひ、無ひ、ぶに、むしうて、手に指かい祢線、さて勢
見に、草踏たりせなぐら、寝させて、髪ハさ祢かぼらの
栗に、まれなし、身ハあらひ、粉給さ候、二度の喰
物、女の三川当方を教え、たこに本紗物を、思せ候
見に、さこ、ほる事ぞうし、花の流うて、女にハ、ひらぶ
こ也に、そなハ、なし、女ハ希や、尚世女ハ丸、形桜色、万事

好色一代男　8冊　WA9-3　03-005
国立国会図書館

袖の海の肴売

安乃國見るに小倉の人のぼり待しに此里の紀もおそき
しなうれば浅つれにまかせて鵜殿野の芦を、まだ
筆に見るもして旅のあはれ深く紙書はじめてけりあひだに
天野川、磯嶋といふ所にて舟子の津枕にしばしの女あつかり
ぞうし右の方は西行法師の舎わと読まし君の跡とて
桜の木部がくれにまはしき二川庵のつゆにも同じく
はくまにも三嶋江といふ里を過しはかないとはかなき女のためし
なかなか浅行末に神崎中町に西をども目よどもいへ
遊女の出しかやとみし所宵日をたつらしく波は打方に
あらく吹かけいなか小畑に乗りはらす風も猛く

備後の国鞆といふ所にちかき湊名にこそし花島八嶋
花川といへる所髪長き定もなくいへば枕ごとく寝ふく阿弥
女郎へさ舟のもと来るを男ありとも見すかしに
日和見るに舟さきまで帆をまく音酒うる声さへ寄る磯
しきちゆる其夜あつく其暁の名残惜しうと
我さへ見苦しく鞆の浦のかくてはかみの桜をあげ
鞆のちかつゆしばしてちや二三里も出て世を命
鼻紙入れの内をふるく稽世紙をさけば花川と
いへる女に起請紙書せ指さしはつて名書の上
染させあるにかせて油断もなき紙にめいよの
女房らしと舟からさけて大笑ひ行かに程なく

小倉に着く。船ぞしきをみれば、本鍋がのこれちらし
がつれ、萬裏をふきかへさせどしの葉前結ひに、一本
鬢ふとくむすびかしに、結びさげ、盤切のおきこさ
いまくきはまく、我ならぬ寸役、まく乗手にして、浮藻
まし梨の猴具、緒にとりわ、馬刀石王鍾奥、取きて、大指
をまとりて、おとひくに、道いせくをさけば、見るん、批所の
畫賣、内裏小鳩より出れ、まくさしやうと申、伴勢こと
義に、やくと以へ、所にもりて、替わらず事、知くて
な紙尋を積だ、いぼまでも、畫紙かへで、草履紙
ぬぎて、奥座敷に、何とうや、浦風のがよいそ
沙ふくみし、肺布を、析筥ハ奥あり、式目使ひし人と

棚もなき舟、荒ぞとく、儀をおきせく、下の間ハ、知り所に
行て、詠やれば、此所ハ上方の、さかしに、何にて、形龍さ須
髪さげなぐら、大形ハうち懸、物ハ、まこしなまる
所な紙よし、今のたやわ物、長崎屋の、ホ川、菓屋の
趣中、まだこ屋の、苗浪、かくらハ、批三人、お文の、中に
外ハ、まくて、尋常なる、内徳こさけ、三人と、行れ、揚屋
町に、日来の大臣、の紙しくぎだ、見ることを
大座敷まくし、尊主内義ぶ入、替りまくく、解紙屋
上方のお客さ田に、何をかるひ、事を、出しの
種になどしとやかくの内に、一所におてきさいて
洮に、こうこ出を、いまだ古風やめ須、一度くに

おきえく、酒ぶりがし、膳我もゆる事、まびくまして
やうまし、鬼を張毛とおもへだや、三種まし、梨の漬の
三味線の只やうましくなりて、おしまくおのぼうら
がうしこ、産配家し、女帝寝まつ分ハ男ハ碎て
前ぼを志らぬ、河がうとおもへだ、女とちのおもしの事
のせんさく、其ひ分、伝懸どの床元、弩の事なし、人と
無物を重いた分すせハしく、気のつまる事も共、五七日
喋ぎの内のこゝろ、密又となまれ、さすがの何ぞう成
やりく、東のくぼハあらゆきとく、むおくえ加さら待て
家我を、賊乞かしの上利ぬ

好色一代男 8冊 WA9-3 03-008
国立国会図書館

好色一代男 8冊 WA9-3 03-009
国立国会図書館

是非ならひ無物

かゝる夜、しらぬ道をちど尋ぬ。中津といふ所也。
いかなる方に、舎ある所をさしてよりなく、其夜は過堂に
ゆうして、明日の日並ぬ待しに、遠く見る里なる樹に矢
倉を敵の関えぬ。是は藤村一角が旅芝居と声
立てよいぬ。看板をみるに、都にて見ぬ。羽
織などゝ待しにかゝの店七といふ。役者是に
こゝりて、あらましを語ましに、是なれ世のならひ今頼き
給ふ事なりまとも、其の中にしく一ぬしにこまに
口をれとなりまして、舞臺動うまへと、其に待しの
長袴是にて定番に、其を屋が出てのうさに、人なみに

郭ぬ所にて、男ぬにはまこ結おかしく、色ふくて、身ぬ
かとぬ志らぬ。若女方ぬそくのかしく、外の動れ邪魔
なしとて、又そこぬ所、退出さ待とく、不思議の日数
色とく、当ふ大坂のうき世が路に、我が事思ませぬ。
人にの祭と尋ぬしに、花屋、たゞここさり、駕籠舁の
西隣に、何しとて世ぬ見ちなく、椋そかんの
暖簾が当て、女の一人、書せり。是は乳をのませ
うたが妹なり。此乳母も、二三年跡に、たゞなくさりぬ。
其後どもむしの四恩とて、何しにこゝ寺もてなし
なりぬ。其書方に、色ぬくりこゝ女、たゞこにハ
おうこんの事物、上にかちん深の布子、鴻繻子の

二川より尼の方に結び、東京ゞ積して、桐の
引下駄をはきて、ゝゝ祢半房に花柚をとさけ
がの小家にたし栗よりて日升の立鴻のまゝ物
の質に札ゝ手もとに所ざるゝと口鼻にさし
や者を頼あらゝ笑しく、ゝ積ハいつなる
女と尋ねを涙人の石ゝひ、竈をさゝのとり
そ積ゝハよ縁しき身のまゝりたゝ織女さん
給分の法やりゝ栗、寝ハ半季居のまゝなる
取ゝと申せば、昔しと望りこまゝ成事まで
所あらの法く事拙笑し、ゝ積ハ問屋方より
たまハと申て、眉目大形なる紙東国西国の客の

寝取さすゝめ拘とれのゝあらゝまゝ物の男ゝ紙ひ
小扇紙望てあゝ事ハ、ゝぼらの是夜にかゝぼらあ
出ゝ事も拘や二方の手本紙なぢ沒、妊めば、昔を
なふ、ゝ縁沒、彩影ハ人にもしひたしる根を、ゝ縁り
まゝ物て、手にもゝ寸正月美色ハ交秋をしらゝ賣て
蕎さり酒に望く、三人より積ハ大笑ひして高麗
拘紙ゝ事思ひ佛神に詣でまゝに重綿
ならゝ緒の雲端、青高く、通ちゝの一口吐しに
人の耳をこまりて、夕ハ夜文く、起き積ゝ事しらゝ沒
状かゝなゝ寝入ゝ、鼈甲のさし拾ゝ本前繪
にて、三月ゝ出来ゝなどゝなしくゝ申せしハ

好色一代男 8冊 WA9-3 03-010
国立国会図書館

好色一代男 8冊 WA9-3 03-011
国立国会図書館

一夜の枕物ぐるひ
肉色は挑灯程なり火がふ川て大晦日の宮おそ給しく
万懸帳十帰ぎ屋の世を今と志のうち待ながら最守
つかり勢て二階に志のびくつまたのなれらび胸をお
まえ耳をふさ給今れ悲しさ命ながらへさらば来の
世かたりに言なりなん扇ハくおもひす若しひすくと
賣声に其こし春のあらしして日のたしめ静に
ぼこに世に恵人れ門を松みどりねして物しふく
手鞠ほ事ハ羽子板の繪を夫婦子のあらぬ
やこ伝想文よ世女男先ぼうに思ひて暦のまみ
物姫たじめおこし人のあらぬ事ぶ立さの心志

事を忘れ事ふも驚ぬ二日ハ越後に武人鞍馬山に
誘ひ待て一ならと云ふ野を行ハ尺ならひの声爰遠ひ
の獏れ札寶舟賣すぐ鰯拵とさして尾寺良く
霄より扉をしめて懸が仙と云へ鰯ほとまて
鍔口の緒にすぐ待ぬ物やいらに成手のさいりをて
ぬや恵てふ雅しく成て着し扇ふ家に籠り
おもひあ待ハ目が身よりと讀し女の事迄もおもひ
出さまて心を宜に成しに庭鳥の志川さす事を
是に目覚おのく叩へ折ひし友とすれ人にさやさ
まとに今霄ハ大原の里のざこ寝とて店屋の内
義姫人下女下人にいらぬ沢老若のまちをなく

好色一代男 8冊 WA9-3 03-012
国立国会図書館

好色一代男　8冊　WA9-3　03-013
国立国会図書館

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

好色一代男　8冊　WA9-3　03-014

国立国会図書館

集礼ハ五文の外

彦籠の頼大原此里ゆく。盈し女ハ馴初。二十五の六月晦日
切ハ。米桂ハ物淋しく。紙帳もやぶれをとき進退。見て
盃ざりにして。佐渡の国。かな山ハ望紙懸行ハ。十八里
こなさ。生電鳴といふ所ハ。渡り月和紙待て。明前五元居ら
ま浜。舟宿の行りじを拓き。此所の事くさみ女ハと。尋ぬまゝバ
いかに北国のなてなまぐとて。行などりたまふる。寺泊といふ
所ハ。俗城町。行案。いざ見せやさだやと。前方よわそこに行
て。見新に。陶子房といふ事もなく。軒まぐらなる。板屋に。此ハ
五人三人居なりまく。甚さ面笑しにかりつゝ八月十日の夕
風ならや。此所ハ裕紙さり。楚りし鳴をよきとおもへぐこ。

いたまて。紬の事紙かへ。金入の襟を。かゝ事ぬといふ事なし。前ハ
今織の縦さ紙。云理にうし。紙にむとび。二布ハ麹な晒ハ深
にして。甚まく。蒸しき。貝にて。是非にし。紙ひと。濃くわ。
鄙ハ。只丸く。ぎハ。墨こく。髪ハ。ぐるまけにるく。前髪すく
なくまけて。水引にて。結深。赤ひたる。緒の雪踏とたこさ。
懐のうちより。手紙さし入。裙紙引あげちよこくとあり
くなりやわ。いやなりかれに。何でなをまぐ。其中で。
見よきがとくやよしにしの。屋ぐそもなく。五文。乾に定に。盃
こ。正直なき。家で。の人こゝろし。小金といふ。物束して
揚屋といふ事もなく。親方七良左文が内に。彰しき
薄縁。愛し。奥の間にやさしくて。屏風引廻してあけ

好色一代男 8冊 WA9-3 03-015
国立国会図書館

押繪と見まゐ花かくけて吉野系の人形板木押の弘法
大師亂の煙入滝倉園太郎多門左衛門が連奴こまみか
大津の追分みよく書し物ぞうし又新みに都なかしく、おもふ
うちみ真主膳我まえ者新いさ日が書て同をなき取食
先蓋とかゝ者ぬまゐ小豆食是ハ有し詠ひ結ささみて穂蓼
盃合こ我心みくしと思へば湯我吾まて終みに書物を出さす
をまゝ寸其節ハ著我をとらぬ上方の事誰がいふと同しなる
志ほしまゝ思へば油火指をかくげそまゐすぐみ小鬢
法者しハ笑ハまもせぬ服たしなぞ居新みに又ゆるしぬ出
ほみひまじみなし程まゝまとかふ返事をせぬ友とせし
人俳寝を引起し酒事みしてはたしまゐ馬家く

蛍一重ゆらゝみを酒のゝ懸六七人声して三国一しや
抑子がゆうのゆゆのと同し事のこうまひを新程に亨主に
抑子きけば此上方まりさくんぎとや小歌が吋笑をまゝわ
室えの若ひ所いふく聖古我せども声がそ後ハぬとや
待新さて世ハ廣ひ事を今ハ有ひ合此不伝誦ハ志川でかと
尋を新みに義みを志らぬとや何をいふくを見しやまの只
寝まゐうとや耳組の内座一枚松竹蒔亀をそめこみの
ゆめん取蒸さまどを枕ハ二川出してさかゝお寝やまとや
あらえさと南かしらみ玉川かゝわ今やくと待かとみ
君様のゆし書して床近く立ながら蜀と紀捨ぎり物を
かしこへうち捨ぐさくとくとくりさみみ見を

好色一代男 8冊 WA9-3 03-016
国立国会図書館

好色一代男 8冊 WA9-3 03-017
国立国会図書館

本綿布子をかりの世
干鮭ハ霜先の菜喰ぞうし。其冬ハ仇渡ニ鴈ゆき世界ニ
舟なく生雲波の行うじとこの魚賣となりて北國の山く
とるこし。今男盛二十六の春坂田といふ所にはじめて
はきねば浦の者しき様ハ浪ゆうはゆ。城ゆ能の上漕ぐ。蜑
の釣舟と讀しハ此所ぞと。此寺の門前より詠まだ紡ぎ
比丘尼声を揃ひうたひ来まれ。是ハと立よまだ。ぼうん深の
布子ゆ。黒編子の二川より。前結びにして。行ゆ所ハ何國
ゆくも同し風俗や。元是ハ大和の事をする身ゆ。行ゆ所ど
いつ川ゆ。おまやう。根ゆかして。楚女同前ゆ。相手を定す。
百ゆ二人といふこそ笑し。行まハ正しく江戸滅多町にて

志乃びちぎりをこ笑し。清林ゆ清まし。茶かこ。其所ハ菱笠ゆ
ありくやうゆ見しぶたやくも。其身ゆなりぬとむりしを語る
ぎて。此お姿ハと尋ぬ。世ゆ所しハ楚ひ尽して胸
はうえて。出こかしまこしの商ひすると語り捨てそまより去
同屋ゆ。紅葉の紫て。はゆ。此津のたんじやう。諸国のつき合。皆
十方盤ゆ。おく新人や。夢五のまそなし。おりこの夢ハ。こ
いかく金銀の光ぞ。恋雛し。上方のたまてハ女とおほしさ者
十四五人も居るゆ見えまたりて。其有様ゆ。髪ゆ
く。老く口ゆ。彩むまきかと。濃て。麻子紋の袖ちいさき恋
物ゆ。志ゆちんの第しも。いぼまなりとも。お同ゆ人ぞと。思ハまき
姿しも。客一人ゆ。独はく。我ハ十日。三十日も。逗留のうちハ

好色一代男 8冊 WA9-3 03-018
国立国会図書館

寝ゐ具の所ゆゑなるし、始終の給仕、其外、腰代うらせ、或時は
幾代ぬりも、自由にはしりひて、至る所に、老者とりもだ、金めづし
くす孫、兩事也、是皆問屋の古仕の女にはつらぬ、銘くに遣
持て、色なぐら、旅人を見懸て、何つまれよし、是を望ふに、此流
津の國西馬の湯女に、聞れ所なし、異名を、不言葉にとく
しやくとゆへり、人の心代くむと、いふ事かと、そこの人に問へた、子細
しらぬ、世を外ハそこく、に、有を、善、是て、是非もなく、やうく下
男代かたらひ、當方より、濟名、通に出て、道に関及し、様子みな
人の嫂らしき者、まぎと、舟子に、捕えられて、浪の枕をなるべ
只、上どけなく、ずとけて、物代ごら、紛だと、やう孫だ、其
通にして帰れ、是此所にて、千瓢と申侍れ、名臣を作りて、

むらしやら、靡くとゆふ事ぞうし、京大坂にゆりし、越嫁と
ゆふ者に遣ハじ、其所化ハと、尋ぬ、或ハ縁をさき女、又ハ
四十におよび、樹色の口鼻、是ハふせりて、鬢より身ごらえ
して、古羔をぬき捨、脇何事の亂色、黒き常にさ面代
がゆるとなや、晴がりゆく、はう世事をうし、住家四五丁を
帷子の上張、並手拭して、伝つけの男を待合、何程この辻
愛の演なみに立はくし、我文ては君の寝屋とうらひ連て
三尾仁介が姿を先させ、我書に戯を、明方迄く馬子に
取はき、左江舟に声を懸、はとめ坂かさなりて、髪も笑
しくなり、腰もぶらはきて、君なく大あくびして、跡よりの
竹杖を引ぎ、ハどが炙れ、犬の為ぞうし、見世つも明た子を

好色一代男 8冊 WA9-3 03-019
国立国会図書館

そまより足ちやに成て家内に充入ば人の目を志のふ
あらの事やさし小娘ハ親のあ又ハ我男を引連我ハ我
母親に背り甘姉ハ妹ハ先に立仙父姪姨の身うちをなく
死なしは命の難面くてざりとハ悲しくぞうきまし事
も閑にな紙不便なる世也洞ハ両のふ紙乗ハ下駄から
かきまくも掻料出して思へばかりのうら店三十日も寄
あまこに隠れ義に習へて教請の機嫌を見小事酒に
両隣をかさふ事こそね木の尚座賢妙なる立まゆ紙
煙なるへし我妻の輩一日くらし月雪のふ紙
事も盃も正月も立ちぬ

好色一代男 8冊 WA9-3 03-020
国立国会図書館

口舌の事云積

あらたなし詠れ竈神やおかまの前に打うえてとすくし
めの前に残るらして縣御子来ふまわ下にはひかゝる色の襟を
かさ称薄衣に月日の彩に残うけし子子や懸帯むまひ
さげうを化粧して黛こく髪はたのだからなでさけて
其五種尋常なれは中くお物尾のぶんゆく成まじ
不思議と人に語るまじよき所へあらるのかよふ事ぞ
あまも不ふ者発まのそめぞ越女のごとくなまるものや
ぞまし呼返して男何居の宿に入く其神姿れたうして
あらうに女躰にのりまうり勝手より出三寸出せば次第に
砕心かうじ事なきは諸直にのりけれ告げまたんとて

十九

其まく抱と寝て焼りや名殘の神奈孫神の下より
かよひ分て必ず程うのくしく何は鴻臣の若も妹のと思ひまで
お手ハと問へだうをなしに今年二十一社ありて我ハ
たもひ慕となりせきに二十七の十月神のお留守きく人も
なきぞとざゐくくどきてそまより常陸の国鹿鳴に使ひ
行て其身も神職となりて出く所くに迎ひ水戸社の前
入て是やこそへ出発なりて志よ迎ける二十昔の口舌を
神に事ませらまし大じんは腹立ちて京恵風をふりせ
十七より二十まで乃晴志ましの婦まへきけまさ女房を
ぞこのさんとの事やこのひ事ぞ是たそろしまもの
文の匠事もしたりおろ代懸ぞ男によろこだせうよいと

二十

好色一代男 8冊 WA9-3 03-021
国立国会図書館

まけもきこえぬ事ともを、ふまくさて此所のるくさみ物と
尋を連だ此仕並かくて、定くの姓女といふ事をなくて
物の淋しきのしこは此義の殺機とて、やとりて女の事ぞ
うし、是ハ人の法ひ下主、陳の時ハつゝハしをる、敕百人法連
たふて、屋敷町をり、其中ふよきの見立て、神代
むあどを合点せ次、なれハいやかさぎや、志ほらしき女ゑ
犬、和青の案て、そこふまりぬ、所くふをまくの事ハ也
夕暮の帰姿ハ家ふ事挽く、すその拶様をたらひ
身をもこ、骨ねりて、かたちの所しきなくしむ志ありハハの
むあふ、如ハ心のまゝ是寝して、今見をうまゝ次鼈甲
のさし櫛花の雲といふ物をさりて、まこし匂ひをます

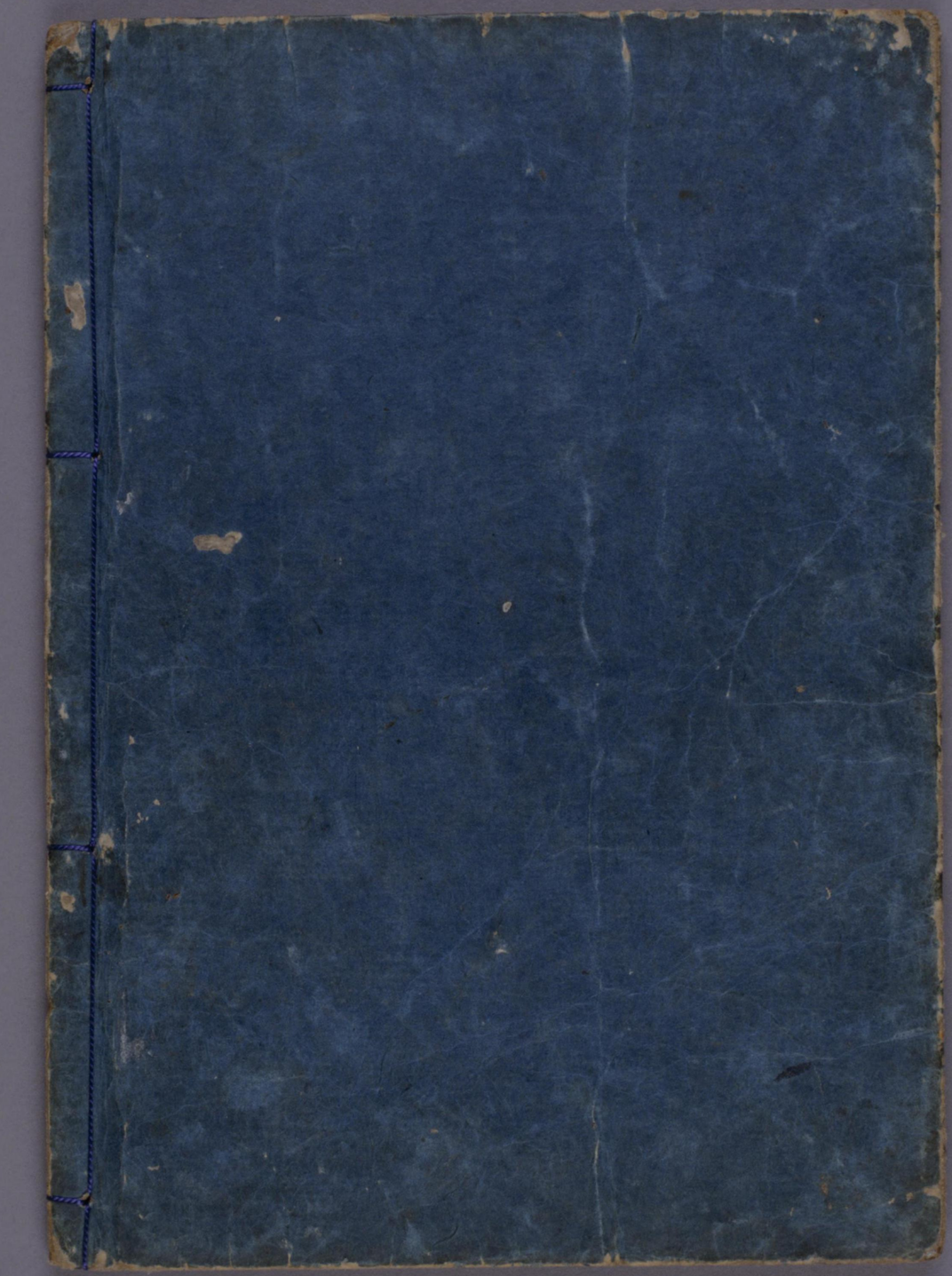
親方をしゆすぞうし、一日三十六文の定め是さへとりて
もどまだや、是ふを馴深く、腹むつかしくなれと申也
同捨くなれ奥まちふさし、懸り八町の月大宮のうかを
如此見尽し、仙墨ふつまてみまた、此所の仙城町ハ
いつの比絶く、其跡なつかしく、和鴻や雄鴻の人ふを
ぬまくしむと、此ハ沖の石、かくるをなき下の帯、末此
松山腰の所世まで、其の道ハやかしとぞ、信竜の所非
素く、此湯まゝせある人をみれかたらひそめ、社人ふ近寄
我ハ鷹鳴より、當社ふ系、七日の祈念して、帰きとの霊
夏ふまゝ粉ひと申せだ、ハ法連を五雛き事なると祈く
いさめあれうちふ、かの舞姫、男のれ我そくのうしを

好色一代男 8冊 WA9-3 03-022
国立国会図書館

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

好色一代男　8冊　WA9-3　03-023

国立国会図書館



好色一代男　8冊　WA9-3　03-024
国立国会図書館